

特集 たけはら魅力再発見

Vol. 3

第3回目となる今回は、「竹原ブドウの歴史の生き証人」として令和3年8月26日に竹原市重要文化財に指定された竹原町の長寿ブドウ（キャンベル・アーリー種）の保存活動に取り組む「長寿キャンベルを守り活かす会」の会長、貞森雅之さんにお話を伺いました。



長寿キャンベルを守り活かす会
会長 さだもり 貞森 まさゆき 雅之さん

●「竹原ブドウの歴史の生き証人」といわれる理由

竹原町の長寿キャンベルは、明治時代から現在まで続く竹原のブドウ栽培の歴史において、ブドウ栽培が拡大する契機となった「キャンベル・アーリー種」です。

竹原市のブドウ栽培は神田家4代目神田甚造が明治3年に栽培したことに始まり、大正時代には現在の皆実新開、吉崎新開、多井新開に広がるブドウ棚の景観を形成することになりました。長寿キャンベルは、ブドウ栽培の拡大期にあたる大正7年に実の収穫を目的として植えられたとみられ、長期間更新されず、樹齢100年を超える古木となることは全国的にみても稀です。

このように、長寿キャンベルは竹原におけるブドウ栽培の歴史を考える上で極めて重要な樹木となります。

●常に試行錯誤の活動

最初は草がたくさん生えており、整備が大変でした。会員は自分でブドウ農園を経営していたり職種は様々なので、みんなで時間をやりくりして草を刈り、防草シートを敷くところから始めました。また、古い樹になれば、一般的なブドウと比べて実が成るのが遅くなったりしていくので、すべてが手探りで行っています。

今年は多くの花が咲き、製品にできるような房がたくさんできました。

●長寿キャンベルを後世に伝えていくために

長寿キャンベルが竹原市重要文化財に指定されたことで、新聞やメディアで取り上げられ始め、その存在を地域の人に知ってもらう機会が増えました。

竹原のブドウ栽培の歴史を後世に伝え、竹原ブドウの価値を高めるためにも、維持管理するだけでなく長寿キャンベルの地域のシンボルとしての活用方法を模索していきたいです。



▲会長の貞森雅之さん（右）と副会長の古田健治さん（左）。その他3名の会員と一緒に活動している

長寿キャンベルを守り活かす会

令和3年4月に結成。竹原のブドウ栽培の歴史を後世に伝え、竹原ブドウの価値を高めることを目的として竹原町の長寿キャンベルの保存、活用等の活動を行っている。



▲長寿キャンベルは現存する4本のうち3本が重要文化財に指定されている。



▲今年、長寿キャンベルの樹木から出来た房